

ナショナル・プライドなき国民統合

吉田 徹

去る九月一日、石破首相がモルドバ共和国の首相の来訪を受けた。大阪万博のナショナル・デーにあわせての来日というが、各国のブースが並ぶ万博のコンベンツ館にあるモルドバのコーナーはひととき小さかった。欧州最貧国のひとつである同国は、人口二五〇万人

あまりを数える東欧の小国に過ぎないからだ。そのモルドバに一カ月ほど滞在する機会が

昨年にあった。数少ない名産品であるワインを飲むためではなく、EU加盟申請国でもあることから、参加するEUの研究チームに誘われたためだ。最初は、ロシアとウクライナに挟まれた小国というくらいの知識しかなかったが、実は複雑な歴史と地理を持つ存在であることを知った。

一六世紀にオスマン帝国の属領となったモルドバは、革命ロシアの自治州、その後ルーマニアの一部となり、さらにナチス・ドイツとスターリンとの協定で分割された経験を持つ。支配したナチは肥沃な土を大量に自領土に運んだという。文化的にはソ連を構成する共和国では唯一、ラテン語系の言語を持つため、併合してからロシア人はアルファベット

の発音をキリル文字へと置き換えるという同

化政策を講じたという。ここからロシア語話者は現在でも二割近くにのぼる。「ルーマニア語は喋れない」というと、返ってくるのは「ロシア語もできないのか」である。

ソ連が崩壊してから領土の東側には「沿ドニエストル共和国」という、ロシア系が支配する未承認国家も抱えている。その地にも足を運んだが、五〇年前にタイムスリップしたかのような風景が広がる地域だ。また、オスマン領だった影響から、南部にはキリスト正教会に属するトルコ系が多数のガガウズ自治区が存在する。

かような多民族国家であり、さらにはウクライナ系やブルガリア系、また少なくともロマ人も暮らしている。ウクライナ系が固まって暮らす地方の農村もあれば、海外で財を成したロマ人の豪邸が並ぶ北部の街もある。

さらに特段の産業を持たないため、人口の約半分は出稼ぎ労働者で、実に国のGDPの四分の一は海外からの送金に頼っている。このため九〇年代から人口は約半減し、少子化にも歯止めがかからない。若者たちの夢はもっと豊かな西ヨーロッパで成功することだ。

小国はいつも大国に翻弄される。永世中立

国を謳ってはいるが、昨年の大統領選では、親EUの現職と新ロシア派候補が争ったことから、ロシア勢力からの情報操作やテロ予告などが相次ぎ、EUとロシアの代理戦争の地と化している。第二のウクライナとなるのではないかと憶測を呼ぶ所以だ。さらに歴史的には自国の一部だったから、ルーマニアも触手を伸ばし、自国旅券を無条件で市民に付与している。バスで乗り合わせた人物はルーマニア系の新興政党を立ち上げる、と意気込んでいた。地域大国トルコからの投資も増えている。ただし、何れかの勢力に依存するわけにもいかない。そうした途端に国は分裂することになるからだ。

ソ連から独立した一九九四年に制定されたモルドバ憲法は次のように掲げる。「法の支配で統治されるモルドバ共和国は人民の尊厳、その権利と自由、人格の自由な発展、正義と政治的多様性が至高の価値を持つ民主的國家である」。

これだけ紆余曲折ある歴史を経験し、それだけに高度に分裂した貴国にとつてのナショナル・プライドとは何だろうか、とモルドバ人の友人に問いかけてみた。その答えは「ナショナル・プライドがないのがナショナル・プライドだ」というものだった。どの国でもナショナル・プライドなるものが希求される近年、歴史を持ち得ない国ゆえの理想が輝いた瞬間だった。

ハよしだ とおる・同志社大学教授V